

# びわによる地域振興

## 高知県南国市立稲生ふれあい館

所在地：〒783-0084 南国市稲生542  
電話：088-865-8817

### 1 地区の概要・取り組み背景

稲生地区は、南国市の南西部に位置し、二級河川の下田川が東西に横断する地形で、肥沃な農地が広がっています。古来より、水稻栽培が盛んで、米の二期作の発祥地です。

また、良質な石灰岩の産地であり、戦後は、多くの住民が石灰鉱工業に従事していました。この石灰は、しっくい<sup>いなぶ</sup>の材料ともなり、この春、改修された世界文化遺産の姫路城の最大の特徴でもある美しい白壁には、稲生地区の材料が採用されています。

このように、農業・鉱工業と特徴ある産業を誇っていた稲生地区でありましたが、近年、全国の地方同様に少子高齢化が進み、現在地区の人口は約1,700人、高齢化率は約36%で、小学生はピーク時の25%程度になりました。

一方、稲生地区では、近年、学びの中心である小学校と公民館の連携が推進されています。それは、2005年より稲生小学校が取り組みはじめたPTCA化（PTAに地域を意味するC：コミュニティを入れた組織）が、1つの契機となりました。また、2008年より文部科学省の学校支援地域本部事業を受託し、一層の地域との連携が図られました（2010年は、全国生涯学習ネットワークフォーラ

ム「学校を核とした地域コミュニティの再構築部会」の視察会場。2011年は優れた「地域による学校支援活動」推進にかかる文部科学大臣表彰受賞）。

しかしながら、活性化されているようにも映る活動ではありますが、今後とも持続可能な地域づくりにつなげていくためには、新しいテーマ・コミュニティによるもう一段の方策が望まれていました。また、小学校に地域住民が参画する仕組みは確立されていますが、公民館への若い世代の参画は、十分ではありませんでした。

### 2 事業の目的

2009年2月に高齢者のグループによって発足していた「稲生びわ研究会」の活動を地域



稲生ふれあい館（小学校と隣接）

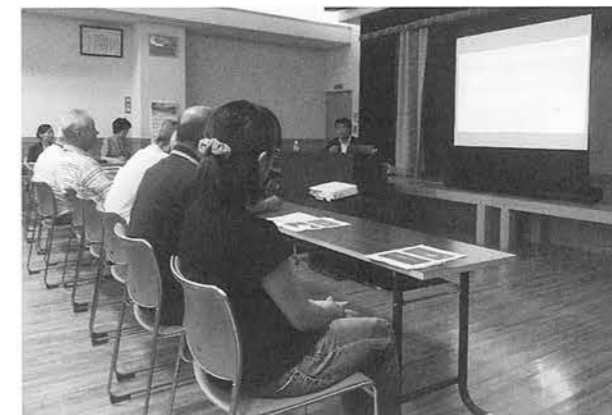
全体で取り組んでいこうと計画し、文部科学省の「公民館等による社会教育活性化支援プログラム」に申請し、採択を受けました。なお、事業名を単なる特産物による振興を意味する、びわの里づくりではなく、社会教育・生涯学習による地域づくりをめざした「びわ色の里づくり」と命名しました。

活動の底辺に流れる大きなテーマとして「学校支援から、地域支援へ。学びの施設を活用した地域創生」を掲げ、これまで学校支援で培った力を地域支援へ移行させていくことを目標に掲げました。

また、本事業を将来も、豊かな公民館活動につなげていくために、高知県版の地方創生「小さな拠点づくり」事業である集落活動センターの開設を見越した展開を早期より計画するため、高知県並びに南国市の担当部局と連携を図りました。

### 3 事業の項目

限られた事業期間でしたので、これまで稲生地区の研究をしていた東京大学及び青森中央学院大学の教授や地元の高知大学医学部・農学部との連携をとり、効率的な事業運営を実施しました。



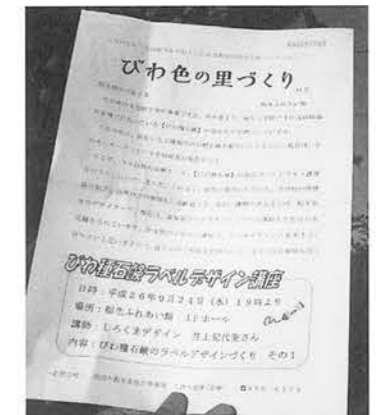
大学教授による講演風景

- 2013年度実施分：大学教授講演3回、びわ葉茶モニター、びわ種ローション・せっけんづくり2回、びわの里紹介リーフレット制作、広報誌発行8回、住民意識調査3回
- 2014年度実施分：大学教授講演1回、びわもも祭り、びわ種ローション・せっけんづくり3回、びわ種せっけんモニター、びわ種ブランドマーク会議3回、広報誌発行11回、住民意識調査2回

### 4 取り組みプロセス ノウハウ

#### (1) 地域ブランドづくりの前に、地域プライドづくり

本事業では、姫路城の改修で採用された地区の石灰とびわの関係など、地域プライドづくりをまず行い、「びわの里・稲生」というリーフレットを作成しました。そこから、「びわもも祭り」という多世代参加型の地区の新たな祭りの創出につなげました。ももを追加したのは、稲生地区が、日本で一番収穫の早い路地ももの産地であることがわかったからです。祭りの創出とももの地域資源<sup>かんよう</sup>の発見は、地域プライドづくりのさらなる涵養ができました。



ほぼ毎月発行した広報誌

(2) 商品づくりの前に、習慣づくり

コミュニティ・ビジネスを持続的に推進するにあたり、商品を開発するときのポイントは、日用で消費するものでなくてはならないと考えます。つまり、日々消費するものを提供しなくては、月々の売り上げの平均化が図れず、将来的な雇用に結びつきません。

そこで、取り組むべき商品は、お茶、ローションとせっけんとなりました。試作を何度か重ね、かつ習慣づくりを図るために、体験モニターをそれぞれ実施し、アンケート調査を行いました。期待以上の回答率とともに、多数のコメントが寄せられ、実際の商品づくりに生かされました（お茶は、今年の秋にティーバッグ版を販売、ローションとせっけんは本年6月に商品見本が完成します）。

(3) 情報発信・共有

住民向けの広報誌『びわ色の里づくり』をほぼ毎月作成し、新聞の折り込みを通じて世帯配布（550部、約85%カバー）、小学校の保護者（55部）には、学校連絡便で配布するなど、絶え間ない情報発信に努めました。

表面には、事業や講演会の案内を記載し、裏面では、各住民意識調査の集計結果や昨年8月発行の『文部科学白書』に掲載されたページを載せるなど、情報共有をしました。

(4) 新たな世代の参画・地方創生へ

本事業において、新たな公民館への参画者は、稲生小学校PTCA研修部の母親たちでした。その方たちの興味のある内容を用意し、彼女らに任せる「場づくり」ができたことが母親の高い満足度につながったと考えます。任せたものは、「びわの里・稲生」のリーフ



びわ太郎VSもも太郎 中華鍋相撲



新年度のびわもも祭り 案内

レットづくり、びわ種のローション・せっけんの試作開発、そしてびわ種のオリジナルブランドマークづくりです。

地方創生・人口急減対策のなかで、優先順位の高いものに「現役子育て中の母親へのケア」があると考えます。それは、子育て中の母親が自分の子どもに「こんな所にはダメ、都会にでなさい」と家庭で教育されては自治体の政策など元も子もなくなるからです。本事業で、稲生小PTCA研修部の母親を事業の一員に取り込めたのは、結果として、分厚い地域づくりに対して大きな成果を残しました。

また、本事業で創出した「びわもも祭り」では、特大中華鍋を色付けして行った「びわ太郎VSもも太郎」が参加者の目を引くなど、大いに盛り上がり、今後は、稲生小PTCAと公民館の合同開催が決定し、公民館を舞台とした多世代参加型の祭りとして定着をさせていきます。

一方、情報共有の一環で、地域SNSであるフェイス・ブックページが開設されました。現在は、投稿者も増え、地区防災連合会・体育会の情報や稲生小PTCA・保育園の情報も発信されるようになり、ICTを活用した地域づくりも期待できます。

最後に、本事業により、高知大学教育学部・農学部との連携を深めることができました。今後は、両学部のほか、高知大学が新年度に全国で初めて創設した地域協働学部とのさらなる連携強化を図っていき、豊かな社会教育・生涯学習の場を公民館舞台に創造し、「びわ色の里づくり」を今後とも、推進していきます。

(南国市立稲生ふれあい館顧問 前田 学浩)



稲生小PTCA保護者



PRリーフレット



ローションづくり



専用ブランドマークの付いたせっけんの見本